
まさかの転生物語

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まさかの転生物語

【Nコード】

N8690X

【作者名】

暁

【あらすじ】

犯罪に巻き込まれ、大事なものを守るために自らを犠牲にし、死んだ主人公。

天命より前に命を落としたため、
彼女はこの世界への転生が叶わなかった。

そうして転生したのは、異世界。

……ドラゴンに転生したようです。

大きなドラゴンであるお父さんやお母さん、
お兄ちゃん、お姉ちゃんに囲まれて、

まだまだ小さなドラゴンの主人公は突き進みます。

なお、残酷描写は保険です。

最初のほうは残酷描写を出すつもりはないですが、
おそらく、途中から出てきますので。

あの日を想う（前書き）

すごい気まぐれに書いてみました。

人外生物が主人公の連載小説書いてみたかったんですね。

あの日を想う

守らなくては。この子達だけは、守らなければ。
私はどうなってもいい。死んだってかまわない。
だけど。だけどの子達だけは…………。

だから、逃げなさい。私のことなんて放っておいて。
早く、安全な場所まで行きなさい。絶対に振り向かないで。
イヤホンをはめて、まわりの音が何も聞こえないように。

聞いてはいけない。聞いたら狂ってしまうかもしれない。
だから、何も聞かずに逃げなさい。

そして、ここには戻ってくるな。

私は、あなたたちさえ無事ならばそれでいい。あなたたちさえ日常に戻る事が出来たなら。

ねえ、どうして戻ってきたの？ どうして泣いているの？
暗闇の中で、ふと思う。

あの子達が泣いている。悲しそうに、辛そうに。

泣かないで。

重たい腕を必死で動かす。重たい瞼を必死で持ち上げる。
そして、口を動かす。

「……………に、泣いて……………の、ちびっこ……………」

「っ！ 姉ちゃん！」

「え！？ 姉ちゃん！！」

「この、泣き虫……おちび……ズが……」

「ちび、じゃないもん！」

おいおい、泣かないで欲しいのに、どんどんと涙が溢れてるよ。これは、動かしづらい私の手じゃ、拭いきれないな。

「い……から、泣くな……。……げろ……」

泣かないで早く逃げて。早く、安全なところへ。
私は放っておいてかまわない。だから、早く逃げなさい。

「逃げない！ お巡りさん、いるもんっ！ も、すぐ、救急車も、来るから！」

「は、犯人も、捕まった、よ！」

そか、この子達は大丈夫だね、警察がいるのなら。
でもね、おちびーズ、救急車は多分、無駄だよ。私は多分助からない。

致命傷を負うと痛みを感じないって本当なんだって、今実感してる。

痛みを感じない。体の感覚が何も、何もないんだ。

分かるのは、傷口からどんどんと血が流れていく感覚、どんどんと体から熱が消えていく感覚だけ。

「な……くな……。て……。寧ろ……。笑え？」

ねえ、だから最期に笑顔を見せて？ この目に、あなたたちの笑顔
顔を焼きついて逝かせて？

ああ、可愛い私の従妹たち。泣かないで、嘆かないで。

21年の人生は、良いものではなかったけれど、私は幸せだよ？

だって、可愛いあなたたちを守れた。私が、あなたたちの未来を繋いだ。

私自身の未来はどうでもいい、どうせ死にたかったんだから。だけど、あなたたちの未来だけは、守りたかったんだ。

だからね、私は不幸じゃないんだよ？

ああ、目の前が少しずつ暗くなっていく。音も遠くなっていく。あの子達が泣いてる。ずっと、ずっと泣いてる。

だけど、私の瞼に焼き付いているのは、最期に見た、あの笑顔。涙を流しながら、それでも私の要望に応えて微笑んだ、あの笑み。

もう、何も見えない、何も聞こえない。

深い闇に、堕ちた。

ようこそ死の世界へー！ 目を覚ましてすぐにかけられた言葉は、これでした。

死の世界。つまり私は死んだ、と。まあ、それもそうか。あれだけ殴られ、刺され、蹴られてすれば死ぬだろうね。

でも、目を瞑れば見える、あの子達の笑顔。涙を堪えて必死に微笑んだ愛らしい姿。

そんな、可愛いあの子達を守ることが出来たのだからよしとしよう、うん。

まあ、とりあえず。私は近くにいた人を捕獲し、声をかけた。

「とりあえず、いろいろと説明が欲しいです」

「はいはい！ じゃ、簡単に説明していきますねー！」

まず、ここは先ほど言ったように死の世界、死した人の集まる世界です。

普通は、天命に従い、人はこの地を訪れます。ですが、たまに天命に逆らい死した人がいるんですよ。

あなたのように。

普通、天命を果たし死した人たちは、しばらくこの地で過ごし、輪廻の輪に戻っていきます。

ですが、あなたたちのように天命を果たさずに死した人たちは違います。

天命を待たずに死した人たちは、この世界に転生することが出来ない。

ですが、天命を待たずに死した人たちの中には、あなたのように望まずして死した人、あなたたちのような人たちもいますし、自ら死を選んだ人もいます。

その人たちを、みんな一緒に考えるわけにはいきません。

ですから、あなたたちのように望まずしてこの世界に來た人たちには、しばらく魂を癒してもらい、異世界に転生してもらいます。

その際は、我々が絶対に幸せな生活になると保障し、そしてお助けしましょう。

だから、あなたはしばらくお休みなさい。

今はただ、その魂を回復させるために、眠りなさい。

目覚めは最悪です（前書き）

ここでドラゴンに転生します

目覚めは最悪です

真っ暗。全部真っ暗。

その中に、ひびが入ったように、光が射す。

何だろう、そう思いながらもどんと襲ってくる睡魔に身を委ねる。

おそらく、まだ魂が回復していないのだろう、そう思いながら。

だが、その眠りは長くは続かなかった。

次にぼんやりと目を覚ますと、先ほどよりも見える光が大きくなっている。

これは何ぞ。

とりあえず、触ってみた。硬いようで、硬くなさそうで……。

これって、叩いたりすれば割れて、もっと光が入るんじゃない？

そう思いながら、少しずつソレを叩く。

お、お！ 予想通り、少しずつそれは割れて、徐々に光が射し込んで来た。

それはいいけど、眩しいな。

そうやってしばらく叩いて、やっとソレは完全に割れ、空が見えた。

えっと、視界に大きく口を開くドラゴンが見えるんだけど、気のせいかな？

私、食べられる？ え？ もうお終い？ 早くね？

そう思っていると、大きく口を開いていたドラゴンは、私の顔を

舐めて来た。

「ぴぎゃーっ!」

可愛くない声ですみませんね、これが地です。

とりあえず、これが夢落ちだと祈って、今は眠ることにします。

うん、夢落ちじゃなかったよ。でも、今はそのドラゴンも人の姿を取っています。

目の前でドラゴンから人になられては、夢じゃないと信じざるを得なかった。とりあえず、何て言ってるかは全然分らないけど、そして、何となく実感。私は人間ではなく、ドラゴンに転生したようです。

まだ全身をしっかりと見てないから分からないが、鱗に包まれた体や、鋭い爪、そして両親であろう二人の大きなドラゴンを見れば、自分もドラゴンだと何となく予想は出来るものです。

それにしても、この世界のドラゴン、っていうか私小さいな！ドラゴンの子供が単純に小さいだけか？父や母であろうドラゴンは大きかったしね。

私の普段の生活場所は、この広大な山の中、の母であろうドラゴンの人態を取ったときの頭の上だ。

まあ、ふあふあしてて、暖かくて気持ち良いんだけどさー。

まだ、この人たちが何て言ってるか全然分からないし。

でも、たくさん愛情が注がれていることだけは分かる。だって、二人とも私を見る目はいつも優しく、私を見るときはいつだって笑顔だから。

まあ、今そんなことを考えていたって何も始まらない。とりあえず、眠たいから寝よう。

転生を認めました

4歳になりました。最近、やっとお父さんたちの言っていることが理解できるようになって来ました。

だけど、まだ全然話すことは出来ません。何を言おうとしても、「ぴぎやー」や、「きやるー」とか、「きゆるるー」としか発音されないのです。

ちくしょう！

あ、体はあんまり大きくなってないよ？ だって、まだお母さんの頭の上で暮らしてるもん。殆ど。

「エーデルファイア、今日は山頂に行ってみる？」

「きゆるー！」

行くー！ 本当はそう答えたいのだが、やはりまともな発音はされなかったか……。そろそろ普通に話がしたい……。

あ、エーデルファイアってのは私の名前みたいだよ？ 言葉も理解できなかった頃から、ずっとこの言葉は発せられてたからね。

「きゆる、きゆるるるるー」

「そうんなに山頂が楽しみ？ エーデルファイアは可愛い子ね」

うん、楽しみだよ。だって、山頂からはこの山がきれいに見渡せるもの。

そうして到着した山頂。そこでは早速私が思い切り叫んでいた。やっほー！！

「きゅーっ！！！！」

あっはっは、やっぱりこんな感じにしかないか。でも、私の下でお母さんは面白そうに笑っていたよ。

「エーデルファイアったら、元気いっぱい」
「きゅる、きやるる」

だって、山が見渡せるから楽しいもん！ そうしていると、私たちのいる場所に、一匹のドラゴンが飛んできた。

大きな青色のドラゴン。あれ、お兄ちゃんらしいです。

「母さん、エーデルファイア」

「サーファイルス。よくここが分かったわね」

「エーデルファイアの声が聞こえたからね。エーデルファイア、母さんに隠れてないで、姿を見せておくれ？」

って言うてもね、お兄ちゃんのドラゴンの姿、大きすぎて怖いんだ。大体、人態でも十分私から見れば大きいのに。

だからせめて、人態を取って？ 怖いよう怖いよう。

「きゅー、きゅるう」

「あれ？ 俺、怯えられてる？ 何で？ 何で？ エーデルファイア、俺、怖くないって」

「……ドラゴンの姿が怖いんじゃない？ あまりにも大きいから。私たちも、ドラゴンの姿をとったら大体避けられるからね」

うん、確かにお父さんもお母さんも、ドラゴンの姿をとったらまず、逃げます。だって大きすぎて怖いもん。

私、まだまだまだまだ小さいんだよ？ お母さんの髪に隠れられ

るほど小さいんだよ？

その状態で、普通のドラゴンのカタチのお父さんやお母さんは怖いに決まってるでしょ？

踏み潰されそうで。

「えっと、これでいいの？」

お兄ちゃんはそう言うのと、ドラゴンから人間へと姿を変える。うん、それならオツケーです。

「きゅる」

「エーデルファイア！ ああ、相変わらず小さくて可愛い」

「きゅる、きゅるきゅるー」

お兄ちゃん。小さな体で羽を広げ、パタパタと飛んでお兄ちゃんの頭に移動する。お兄ちゃんの髪、短くてつんつんだから、お母さんの髪に隠れてるときほど気持ちよくないんだよね。

でも、優しいお兄ちゃんだから好きだよー。

ちなみに、お兄ちゃんの見た目年齢は、大体高校生くらい。実年齢は知らない。教えてもらえないし、まともに話せない今は聞けない。

でもま、どうでもいいか。みんな優しいしー？

「きゅるきゅー」

お兄ちゃん大好きー。

「あー、エーデルファイアは本当に可愛いなー」

「さ、そろそろ山を下りましょうか。サーファイルス、ドラゴンに戻って、お母さんたちを乗せて行ってくれる？ エーデルファイア、

お母さんのところに戻っておいで」
「きゅるー！！」

お兄ちゃんが大きなドラゴンに戻るのならば、今すぐに！！と
りあえず、お母さんの髪に隠れて、大きなドラゴンの姿を見なくて
良いように丸まっておこう。

「エ、エーデルファイア……」
「きゅるー」

私はお母さんのところへ戻ると、しっかりとお母さんの髪を掴み、
落ちないようにする。

そして、私がいなくなると、お兄ちゃんはすぐにドラゴンの姿に
戻ったらしい。お母さんがその背に乗り、お兄ちゃんは飛んだ。

お兄ちゃん空飛んでるよ怖いよ。お兄ちゃん大きいよ怖いよ。

それからさほど経たずに、私たちはねぐらである洞窟へと戻った。
おとーさん！！

「お？ お帰り、エイシェリナ、サーファイルス、エーデルファイア」

そこにいるのは見た目20代前半の赤髪の男。これ、お父さん。
名前はフォンシユベル。あ、エイシェリナって言うのはお母さんの
名前ね。お母さんも同じく、20代前半にしか見えない。ちなみに、
髪の色は青。

「きゅる、きゅるきゅーきゅー」

私はそうやってきゅるきゅる鳴きながらお父さんの頭へと移動す
る。あ、美味しそうなおい。

「美味しそうなおいだろう？　今日はうまい肉を手に入れたからな」

そう言ってお父さんが見せるのは、美味しそうなお肉を使った料理。こんがり、いい色に焼けてるね。美味しそうだ。

そんな意味を込めてきゅるきゅる鳴くと、お父さんは嬉しそうに微笑んだ。

「うむ、エーデルフィアがそう言うならば、今日の料理は中々のものだな」

「本当に美味しそうなおい。ね、フォンシュベル、みんなを呼んできても大丈夫？」

「ああ、みんな散らばってるだろうが、頼んだぞ。エーデルフィアはどうする？　お母さんと一緒にみんなを呼びに行くか？　お父さんというか？」

「きゅ」

お父さんという。そう言う意味を込めて、お父さんの髪を掴んだ。お父さんは微笑む。

「よし、お父さんと一緒にいるんだな。あー、エーデルフィアは可愛すぎだ」

「きゅっきゅー」

お父さん好きー。ドラゴンの姿さえとらなければ、ね。とりあえず、お母さんたちが戻ってくるまではお父さんに甘えていようっと。

「ん？　エーデルフィア、羽が汚れてるぞ？　ちょっと待ってなさい」

その後、自分の頭から私をとり、抱き上げたお父さんは告げる。
いつ汚れたんだろう？

それから濡らした布を持ってきたお父さんは、優しく私の羽を拭いてくれた。はわわ、気持ちいいよ……。気持ちよすぎて、寝ちゃいそう……。

「うーん、落ちないなあ。……洗うか？」

え！？

「中々落ちないし、汚れたままだと染み付いて取れなくなりそうだから、洗おう。な？」

はい、イヤです。人間の頃はお風呂は好きだったけど、この小さな体でお風呂はおぼれそうで怖いです！

そう言いたいのが、言えない。お父さんはその間にも、私のお風呂の用意をしていたよ……。私をテーブルの上に置いて。

少しずつ、逃げようかな。……うん、テーブルの下を見ると怖い。高い。でも、逃げなくちゃ……。

落ちた。うまく羽を広げ切れなくて、落ちちゃった。

「エーデルファイア！ 何をしているんだ、危ないだろう」

「きゅー」

あわわ、お父さんが怖いよあ。思いつきりテーブルから落っこちたからね。思いつきり体打っちゃったからね。痛いよ。

「きゅい、きゅーくるるる」

「ああもつ、痛かっただろう？　まだ小さいんだから無理をするんじゃない」

「きゅー」

「ごめんなさい、お父さん。」

「ちゃんと反省したか？　なら、お風呂に入ろうか。お風呂に入れば、気持ちよくて痛いのも忘れられるぞ？」

「きゅー！？」

なぬ！？　お風呂から逃げるために落ちて、結局お風呂に入らなくてはならないのか！　で、でも痛くなくなるなら……。怖いけど。あ、でもお湯に浸かってる間はあつたかくて気持ちいいなあ。

でも、上からお湯かけないで！　上からお湯をかけられると怖い！

「きゅー！　きゅきゅー！」

上からかけられるのは怖いって！　怖いんだって！

「よし、きれいになってるな。どうするエーデルフィア？　もう少しお湯に浸かっておくか？」

「きゅー！」

浸かっておく！　そんな意味を込めて鳴く。だって、温かくて気持ち良いしさ。しかも、さっきの恐怖と気持ちよさで、痛いのが行っちゃったしね。

「ただいまー。フォンシュベル、エーデルフィア」

「きゅい！」

お母さんとお兄ちゃん、そしてほかのお兄ちゃん、お姉ちゃんたちが帰って来た。私は急いでお湯から抜け出し、飛んでお姉ちゃんたちの下へ向かう。

「わわ！ お風呂入ってたんだね、びしょびしょ。ほら、まずは体拭こうね」

これを言うのは一番上のお兄ちゃん、カーヴァンキス。そして、私が飛びついたのはその妹、お姉ちゃんのオースティアだ。

あ、もちろん二人とも人態取ってるよ？ ドラゴンの姿だと私が寄って来ないから、逃げるから。

乾いた布で私の体に、鱗を伝う水をきれいに拭ってくれるカーヴお兄ちゃんとティアお姉ちゃん。

その後は、みなでご飯だ。みんなは手づかみか、スプーンやフォークっぽいもので食べているが、私はまだこの手で上手に掴んで食べられないので、そのまま皿に盛られた料理にかぶりつく。

まあ、お父さんもソレが分かっているから、私のご飯は食べやすいものばかりと考えて作ってくれるんだよね。お父さん大好き。

はぐはぐとかぶりつく肉。肉美味しい。でも、野菜も美味しいんだよ？ ドラゴン肉食で野菜は食べないって言う勝手なイメージがあっただけに、おかずに野菜が出たときはびっくりしたけど、美味しいからそれでよし。

「旨いか？」

「きゅー！」

「うん、美味しい」

「今度調理方法教えてくれ」

「あ、俺も」

「フォンシュベルは本当に料理好きよね。私が料理する暇がない」

あはは、お母さん、料理やめて。前、頭の上からお母さんの料理
見てるとき、本当に怖かったんだから。

よく分からない調味料を大量にいれるは、その辺の加減を知らな
いは、何かを焼けば絶対に焦がすはで。

確かあの時は、お兄ちゃんたちが帰って来た瞬間に飛びついてい
ったんだっけ。で、お兄ちゃんたちの頭の上で丸まってた。

「げ！？ お母さん何してるのさ！？ エーデルフィアが怯えてる
！！」

「あら？ どうしたの？ お母さん怖くないでしょ？」

「……ああ、この意味不明物体のせいか。お母さん料理やめて。怖
すぎ」

そのおかげでお母さん、よっぽどのことがない限り料理をしな
くなりました。最近ではお母さんの料理を避けるために、サーファお
兄ちゃんやカーヴお兄ちゃんが料理を覚えるようになった。

おかげで、あの黒魔術的な料理を見ることは無くなったよ、安心。

「美味しかったー。おとーさんごちそうさま」

「きゅきゅー」

ホント、美味しかったなあ。お父さんのご飯は美味しいから好き
だな。

「さ、ご飯も食べたし、エーデルフィアはそろそろ寝なくちゃね。
いっぱい食べていっぱい寝て、大きくなるうね？」

「きゅー！」

大きくなるなら寝る！ いっぱい食べていっぱい寝る！
そうして私専用の小さなベッドに飛んで下りた私は、そこに置かれたやわらかい布の上で、きれいに体を丸める。気持ちいい！。
よし、眠たくなった、おやすみなさい。

狩りに行きましょう

10歳になりました。やっと日常生活で困らないくらいに話せるようになりました。いやいや、お父さんたちにはかなり苦勞をさせたなあ。私の中々話せないから。

でもまだ、やっぱり体は小さいんだよねえ。未だに私の生活の場のメインはお母さんの頭の上だからね。

でもいいの、楽しいから。私の考えてることが、やっと伝えられるようになって嬉しいから。

「エーデルフィア、今日は何が知りたい？俺たちが何でも教えてあげるよ」

「んとね、そうやって人間の姿をとる方法が知りたい！」

ちなみに、しゃべれるようになってからの私は、とにかく質問攻めだ。お父さんに聞き、お母さんに聞き、お兄ちゃん、お姉ちゃんに尋ねまくりだ。

あれはどうなってるの？あれはどうしてああなるの？どうして？どうして？

小さな子供特有の興味の持ち方で、毎日を質問と回答の日々になっている。

「エーデルフィアが人間の姿を取るの、まだまだ無理だよ？これは100を超えたあたりから、自然に分かってくるものだし」

「そーなの？うー、残念ー」

人間の姿を取れるのならば、練習してでも人の姿になりたかったのにな。……でも、今の私が人になったら、何歳くらいに見えるんだろ？幼児？小学生？どっちもイヤだわー。

でもまあ、今はまだちびちびドラゴンでいいや。そのほうがお母さんの髪に隠られるからね。

「ほら、おいでエーデルファイア」

そうしてお母さんに呼ばれた私はお母さんの髪の中に移動する。パタパタ、羽を動かして移動した。

お母さんの髪の中って落ち着くんだよなー。小さい頃からずっとここばかりだからねー、あはは。

「ちょ、お母さんばかりエーデルファイアと一緒にはずるいつて。エーデルファイアおいで。一緒に狩りに行こう?」
「きゅ!?」

あ、しまった。つい普通に鳴いちゃった。でも、狩りは行きたい! 行きたいよ!

「ほーら、行きたいならおいで。外に出て、俺の背中に乗って」

それと、お兄ちゃんたちのドラゴンの姿もやっと怖くなくなったよ。お父さんたちはまだ大きすぎて怖いんだけどね。

その後、外に出たカーヴお兄ちゃんがドラゴンの姿を取り、その上にお兄ちゃんたちが人態のまま乗り込む。そして私は、お姉ちゃんの頭の上だ。

そうして私たちが乗り込むと、カーヴお兄ちゃんは大きな羽を広げ飛び立つ。おお、地面がよく見える。

「エーデルファイア、危ないから身を乗り出したらダメだよ」

「って、言ってるそばから飛ばされそうだよ。エーデルファイア、ち

よつと抱き寄せるよ」

「きゅ、きゅきゅ……」

身を乗り出して下を見ていた私。その結果、飛ばされかけたらしい。サーファお兄ちゃんが私を抱き寄せてくれた。うん、これで飛ばされないね。

抱き寄せた後のサーファお兄ちゃんが真剣な目で注意してくるから、つつい普通に返事せずに鳴いちゃったじゃんか。

「怒ってないから顔を見せて？ 大丈夫だから」
「きゅー」

あわわ、本当に怒ってない？ 怒ってない？ 怖いよ。怖いと、どうしても普通に話せずに鳴き声をあげちゃうんだよね。

「怒ってないって。だからね？ ほら出ておいで」
「きゅきゅー？」

本当？ そう尋ねたいのだが、話せなかった。鳴き声で尋ねることとなるが、サーファお兄ちゃんはあると理解してくれた。

「怒ってないよ。でも、今度からは気をつけてね？」
「きゅー！」

なら、大丈夫、かな？ でもまだ怖くて話せないんだけどね。でも、もう少ししたら恐怖も消えて、話せるようになる、と思う。

そうしてサーファお兄ちゃんに抱き寄せられたままではばらく飛ぶと、いつも狩場になっている場所にたどり着いた。

「さ、さっさと下りてくれ。俺も人態を取る」

そうしてカーヴお兄ちゃんも人態を取ると、獲物探しの時間だ。とりあえず、私はお姉ちゃんの頭の上だが。

「エーデルファイアはここ、お姉ちゃんの頭の上。危ないから勝手に動いたらダメだからね」

「うん！」

お姉ちゃんから離れると危なくない？ 私、お姉ちゃんたちの使う魔法？ 魔術？ まだ全然使えないんだから。

「お、いたいた。ティア、エーデルファイアを頼むぞ。サーファ、行くか」

「ん。エーデルファイア、何があっても、絶対に、ティア姉から離れるんじゃないよ？」

そこまで区切りながら言わなくても。離れたら危ないから、きちんとティアお姉ちゃんと一緒にいるって。

私、たったの10年で死にたくないよ？ 前世でも21年しか生きてない、ただの若輩者だったんだから。

「よし、合図をしたら頼むぞ」

「おっけ」

「……………、Go！」

カーヴお兄ちゃんが言うと同時に、サーファお兄ちゃんが魔法だか魔術だかを放つ。威嚇ってヤツかな？

そして、獲物がそれで怯んだ瞬間にカーヴお兄ちゃんが飛び込ん

だ。おお、かつこいい。あつという間に一匹仕留めた。

「きゅ？」

つてあれ？ いきなり視界が動いた。……さっきまで私たちのいたところがお兄ちゃんの放った魔法で真っ黒けです。

そしてその真っ黒けの地面には、何かもう一匹獲物がいた。……つまり、私たちはその獲物に襲われかけていたと。それに気づいたティアお姉ちゃんが避けて、お兄ちゃんの放った魔法に焦がされたわけか。

うん、びっくりした。

「大丈夫、エーデルファイア？ いきなり動いたからびっくりしたでしょ？」

「きゅ、きゅう……」

お？ うんと答える予定が、鳴いて答えるになっちゃったぞ。相当びっくりしてたんだね、私。

「でも、大きいのが獲れたから今日はいいのが食べられるよー」

「きゅきゅ！？」

なぬ！ 何ですと！？ いいのが食べられるのは歓迎でしょう！

「お、機嫌は戻ったみたいだね。なら、帰ろう。ほら、背に乗って」

そうしていると、いつの間にかお兄ちゃんが人態を解いて、ドラゴンの姿に戻っていた。私はしっかりとお姉ちゃんの頭の上に乗り、髪に掴まる。

それを確認したのかどうかは分からないが、お姉ちゃんもドラゴ

ンの姿となったカーヴお兄ちゃんの背に乗った。

うふふ、帰ったときのお父さんの反応が楽しみだなあ。

「おお！ いいのを捕まえてきたな。今日はご馳走だな」

帰って、獲物を見せたときのお父さんはすごかったよ。目を輝かせてお兄ちゃんから獲物を受け取ってた。
今日は本当にご飯が楽しみだ。

そして、帰って来た私、現在お母さんに捕まっています。

「お帰りなさい、エーデルフィア」

「お母さん、私たちには？」

「お帰りなさい、エーデルフィア」

おお、お帰りの挨拶が私限定。つまり、これはこっちに来いと、そういうことだね。

「きゅっ」

んちよ、よいしょ。羽を広げてせっせと飛び、お母さんの下へ向かう。

「お帰りなさい、エーデルフィア。あなたたちもね、サーファイルス、オースティア、カーヴァンクス」

「おかーさんただいまー」

「エーデルフィア、怪我は無い？ 大丈夫？」

「大丈夫だよー、お兄ちゃんたちが守ってくれるもん」

だから、大丈夫だって！ そんなに強く抱きしめないで！！ 痛い、痛いから！

「きゅ、きゅきゅー！！！」

咄嗟のときは普通に話せないから、それで悟って離して！

「お母さん、エーデルフィア、痛がってない？」
「きゅ！」

分かってくれた！ 助けてお兄ちゃん、お姉ちゃん！

「あら？ 大丈夫でしょ？」

「きゅ……きゅい……」

最早話す余裕もない時点で気づいてもらえるかな？ お母さん。痛い痛い痛い痛い。

「痛がつてる！ 痛がつてるから！！！」

「ああ、ゴメンねエーデルフィア。さ、あなたはお昼寝の時間だから、休もうね」

お昼寝？ 狩りについて行ったら、絶対に帰ってきてすることはお昼寝だよ、疲れてないのに。でも了解、きっちり寝ます！ 大きくなるためにもしっかりと休みます！

そうして、昔と比べて少しずつ大きくされている私専用のベッドに移動し、きれいに丸くなる。

じゃあ寝るけど、ご飯の支度が整ったら起こしてよ！ ご馳走楽しみなんだからね！

ちゃんと起こされたよ。って言うか、いいにおいが漂い始めてぼんやりと目を覚まし始めたら起こされた。ごはーん！

「エーデルファイア、いいにおいがしてるだろう？ ご飯だよ」
「うん！ いいにおいー！」

肉の焼けた美味しそうなにおいが漂ってるねー！ うん、ばっちり目は覚めた。

「おはよう、エーデルファイア。よく眠れた？」
「いっぱい寝たー！ お腹空いたー！」

このいいにおいには逆らえない！ 早く食べようよ。
そうして私がテーブルの定位置につくと、お父さんとお母さんが微笑み、スプーンとフォークに手をつけた。

食事開始の合図ですね、分かります！！

いっただきまあす！！

目の前に置かれた、こんがりと焼けた肉に思い切りかぶりつく。
うん、すっごい美味しい！

だが、そのままかじるのでは、骨に付いた肉をきれいに食べきることが出来ないぞ！ それが悔しい！

が、だがね！ 私が自分できれいに食べようとしても、ドラゴンの手と爪じゃきれいには取れないのだよ！ 悔しすぎる！

「エーデルファイア、貸してごらん。きれいに取ってあげる」
「お姉ちゃん！ お願い！」

お姉ちゃんのありがたいお言葉に、私は横に座るお姉ちゃんに皿ごと肉を手渡す。きれいに取って！ きっちり食べる！

……まあ、私はドラゴンの姿だし、骨も食べるんだけど、肉は肉。骨は骨で別に味わって食べたいんだ。

「ほら、きれいに取れた。でも、骨も残さず食べなきゃダメだよ？ これも、尊い命なんだからね」

「うん！ ぜーんぶ、ありがたく、美味しく食べるよ！」

私たちは、常日頃から命を喰らって生きているのだから、それを忘れてはならない。私たちが食べているこれも、尊い命。私たち生き物は皆、命を喰らうことで、自らの命を繋げているのだから。

そうしてきれいに取ってもらった肉を食べた後は、骨だ。骨はこの両の手でしっかりと掴んで、がじがじと齧る。噛めば噛むほど味が出る。最高！

そして食後。……まだ寝ないよ！ お昼寝したもん、ご飯前に起きたばかりだもん！

「さ、エーデルフィアは………」

「寝ないよ！」

先に釘を刺すべし！

「さっき起きたばかりだから眠くない！ だから寝ないからね」

「でも、寝ないと大きくなれないよ？」

「うー！！ で、でも眠くないもん！」

「横になっただけで、眠たくなれるかもよ？ だから寝ようね」

「や！ 眠くない！」

早く大きくはなりたいたいけど、寝れないもん！ ま、まあ前の狩りのときは帰ってきてお昼寝して、それからすぐご飯食べて、その後すぐに寝ちゃったけどね。

でも今日は眠たくない！ この間はご飯のときもうつとしてたから寝たけどさ。

「いいから寝ようね、エーデルフィア」

「きゅっ！..」

って、いきなり持ち上げないでよお父さん！ まだ寝ないって..！

「あつはつは、相変わらず可愛い鳴き声だ。でも、成長のためには寝なくては」

くう！ 可愛いとか褒めても、それでも寝るとのたまうか！ で、でででも、ここでちゃんと寝れば早く大きくなって、人態を取るのも早くなるかな.....。

..... よし、今はベッドに丸まっておくだけ丸まっておこつ。それで眠たくなればよし、眠れなければ泣き付けばよし！

結果、私はお父さんに抱えられたままでベッドまで運ばれ、下ろされた。

「ほら、いい子だから寝ようね」

むう！ 仕方あるまい、眠れるかどうかは置いておいて、とりあえずベッドで丸まろうじゃないか。

人間は怖いです

きゆるっ？ そんな声で鳴きながら私は目を覚ました。結局あのまま眠れたみたいだね。

ってあれ？ まだまわり暗いね。まだ夜？ そう思いながらベッドを出て、近くで眠っているであろうお父さんたちを探す。

「きゆる？ きゆるー？」

ってあれ？ いない。もう起きてるの？ まだ暗いよ？ お父さんたちってこんな早くから起きてるの？

「きゅっ、きゅっ」

「ん？ エーデルファイア、もう起きたのかい？ 起きるにはまだ早いよ、もう一度お休み」

鳴きながらお父さんたちを探していると、案外早く見つかった。結構そばにいたよ。

「ほら、ベッドに戻ろう。しっかり寝て、大きくなろう。な？」

「きゅ、きゅー」

うう、ずっと寝てばかりだよ。でも大きくなれるって言う言葉には勝てない……。早く大きくなりたいけど、寝てばかりなのも……。

そう思っている間にも、お父さんは私専用ベッドへと運ぶ。……この籠ベッドから逃れられるのはいつの話だろうなあ。

最初から比べれば少しずつこの籠ベッドは大きくなってんだけど、どこまで大きくなるんだろ。

「いい子だから寝ようねー」

結局寝かされるのか、面白くないな。

でも、ベッドに戻って丸くなれば簡単に眠れるのが幼さ故か……。

まいつか。

とりあえずくるっと丸まり、目を瞑る。眠れるかどうかは別として、こうしてるだけでお父さんが安心、というか何も言わなくなるならそれでいいよね。

きゅっ？ いつの間にかまた眠ってたみたいだね、びっくり。寝れないと思ってたのになあ。

あたりを見渡すと、もう明るい。よし、朝だね。これで起きてもベッドに戻されないよね。

「きゅっ、おかーさん！」

「おはよう、エーデルフィア」

「あ、起きたんだエーデルフィア。今日は何をする？」

お兄ちゃんたちもお母さんと一緒にいたんだね。今日は何を教えてもらおうかな。

昨日の肉が残ってるはずだから、今日は狩りには行かなくていいだろうし。だから、うーん、どうしようかな。

……！ そうだ、こうしようつと。

「食べられる草と、食べちゃいけない草の見分け方教えてー」

分かれれば、草を摘みに行くだけなら私一人でも行けるようになるからね。いつまでもお兄ちゃんたちと一緒にじゃ、効率悪いし。

「よし、ならもう少ししたらいつも草を摘みに行く場所に行こう。
そこで教えてあげるね」

「うん！」

きゅい！ 鳴きながらお礼も込めてお兄ちゃんたちの周りをふよふよと飛び回る。そんな私を見つめるお兄ちゃんたちの目は本当に優しい。

あはは、お兄ちゃんたち大好き。そう思いながら飛んでいると、不意にお母さんに捕まった。え？ 何？

「エーデルファイア、あの子達がいるから大丈夫だとは思っけど、気をつけるのよ、いい？」

「うん！ よっぼどのがあったら、お母さん呼ぶね」

多分大丈夫だと思うけど。

「何かあったら、大きな声で呼びなさいね。ドラゴンになって、エーデルファイアたちを助けに行くからね」

分かった、大きな声で呼ぶよ！ おかーさんっ！ って呼ぶからね。そのときは助けてよ。

それからしばらくして、私はドラゴンになったお兄ちゃんに乗り込み、いつも草を摘む場所へと向かう。

緑！ 緑！ 緑！ きれすぎる！ いつ見てもきれすぎるだ！

「よし、じゃあお兄ちゃんたちの食べられる草講座を開講しようか」「うん！」

お兄ちゃん、よろしく！

「まず、これ。絶対に食べちゃダメだよ。食べたら死んじゃうから」

「ふえ!？」

「俺たちには大して害はないけど、エーデルフィアは小さいから、簡単にこの毒にやられる」

「こ、怖い……」

この毒にやられるのは私だけです。くう！

「まあ、これはすぐに分かるから大丈夫だよ。ほら、ここ見て」

カーヴお兄ちゃんはその言って、葉を裏返す。そこには黒い毛?のようなものが生えていた。

「これはこの辺の草で唯一、裏側に黒い毛のようなものが生えてるんだ。だからすぐに分かる」

な、なるほど……。それは簡単でいいかもしれない……。

「なら次。これは食べられるけど、こっちは食べられない。そっくりだから間違えないようにね」

「ん、んー? どう違うの? 全然分かんないよー」

そう言っで見せられた草は、全く同じものにしか見えなかった。じっくり見せてもらっても、どう違うのか全く全然分からない。

お兄ちゃんたちからその草を両方とも受け取り、見比べてみる。

……あれ? どっちが食べてもよくて、どっちがダメなんだっけ?

あれ? あれえ?

「お兄ちゃん、どっちが食べてもいいんだっけ？」

「右に持つてるほうが食べても大丈夫なほう。左に持つてるのは、絶対に食べないように。いい？」

「はい！」

なるほど、右に持つてるほうは食べても大丈夫で、左に持つてるのは食べたならダメなのか。うん、見分けがつかない。

うーん、じっくり見ても全然分らないぞ？ お兄ちゃんたちはどうやって見分けをつけてるんだろ？

「お兄ちゃんたちはどうやって見分けをつけてるの？ 全然分らない」

「ん？ 見てもわかんないよ？ これはおいで区別するの」

説明はお姉ちゃんがくれました。おい？ おい……。

「くちやつー！」

た、食べられないほうの草のにおいが恐ろしいほどやばい！ すっごくいきさい！ ありえないにおいだ！

そうしていると、不意に私たち以外の声が耳に届いた。その瞬間、カーヴお兄ちゃんは人態を解き、ドラゴンの姿に戻って私たちを庇う。

何か話す声だね、何て言ってるのかはよく分らないんだけどさ。

「お、おい……、ここどこだよ……」

「知るかよ！ でも、早く戻らないと……」

「ここって、竜神様のいらっしゃる山だぜ！？ 無礼にならないうちに戻らなくちゃ」

「なら、帰るための道を探して来いよ！」

……？ 竜神様？ っていうか、迷子？

「しつ。エーデルファイア、喋らないで」

「きゅ？」

「人間は絶対に敵ではないと言い切れないの。今からお兄ちゃんが
追い払うから、それまで黙っていて」

人間って、敵なの？ 微妙なところなのか。そうしていると、さ
すがに大きなドラゴンの姿に戻っているカーヴお兄ちゃん存在に
人間たちが気がついたようだ。

「りゅ、りゅりゅりゅ、竜神様！ も、申し訳ございません、迷っ
てしまいましたー！」

「町へ戻るなら、あっちの道だ。早く帰れ」

カーヴお兄ちゃんはそう言っで、ある方向を指差す。あっちに町
があるのかあ、行ってみたいなあ。

そうしている間も、お兄ちゃんは人間たちが町へと戻るのを待っ
ていた。……あれ？ 人間と目が合った？

「ち、小さなドラゴン！？」

「きゅ！？」

あ、あわわ。思いつきり目が合った。ガン見された！ あわ、あ
わわわわ。げ、限界！

「 ぴぎゃーっー！！」

思い切り叫んじゃったよ。だって、あんなにしつかり見られると怖いじゃん！

「とつとと帰れ。弟妹たちに手を出したらそのときは……………」

そうやって私が叫んでお姉ちゃんにしがみ付いたからか、カーヴお兄ちゃんのまとう雰囲気怖くなった。あわわわわ。

お兄ちゃん怖い。人間怖い。お兄ちゃん怖い。人間怖い。

「おかーさんっ！」

ばさっ。

呼ぶと同時に羽を動かす音が耳に響いた。ぴぎゃーっ、お母さんのドラゴンの姿は大きくて怖いよう！

お母さんはそれに気がついてくれたのか、私たちの目の前に下りると同時に人態を取った。人の姿になったお母さんに、とりあえず飛び込む。

「おかーさん！」

「エーデルフィア！ 何？ その人間が何かしたのね、覚悟なさい」

はわわ、お母さんも怖いよう。でも、今さらお母さんから離れるのはもつと怖いよう。そんなこんなで、私はお母さんの頭の上でしっかりと髪を掴んでいた。

ちなみに、その恐ろしいお母さんを止めたのは、お兄ちゃんたちだったりする。

「お母さん、ちょっと目が合ったただだから手加減してよ！？」

「何かされたって言うわけじゃないの。なら、この姿で一回ずつ殴

るだけで許してあげる。その後は町に戻してあげるからね」

い、一応手加減されてる、のかな？ 一発ずつ殴っただけで許すって言うてるし……。ってあれ？ そもそも、その人間悪くないんじゃないね？

「きゅ、きゅー……」

それを訴えるために、少し強めにお母さんの髪を引っ張ってみた。でも怖いからうまく喋れない。

「ああ、大丈夫だからねエーデルフィア。何も怖くないから」

いやいやいや、そう意味じゃなくてですね。でも、今の私じゃ普通に話せないしなあ。

うん、ゴメンね人間さん。私じゃ、このお母さんを止めることは無理です。

結局お母さんは私を頭の上に乗せたままです。その人間を殴りました。一発、グーで一撃入れました。

思い切り振りかぶって殴るものだから、私が落ちるかと思ったよ。咄嗟に髪を掴んだから落ちなくて済んだんだけどね。

「よし、これでいいわ。後はさっさと山を下りなさい」

い、痛そう……。殴られた人間の頭には、きれいなたんこぶが出来上がっていた。ゴメンね、人間さん。

「町はあっち。こっちに来ないでくれる？ 可愛いこの子が怖がるから」

「は、ははい！ 申し訳ありませんでした、竜神様」

と、とりあえず早く目の前から消えてよう。目が合いそうで怖いんだよう。人間大きいから怖い！

目に涙を滲ませ、人間が見えないようお母さんの髪にしっかりと頭をつけていると、その間に人間は山を下りたらしい。お母さんが頭の上から私を抱き下ろした。

「もう大丈夫だから。ほら、人間なんていないでしょう？」

言われてずっと瞑っていた目を開く。うん、何もいないね、よかった。

「エーデルファイア、泣いてたんだね。可哀想に」
「きゅう」

お母さんに抱かれた私にお兄ちゃんたちは近寄り、私の目尻に光る涙を拭ってくれる。ありがとーお兄ちゃん、好き。

でも、転生して初めて人間を見たけど、この小さなドラゴンの姿で人間を見ると、本当に怖いな。

今日は人間の姿を取ったお兄ちゃんたちがいてくれたから怖くなかったんだけどさ、私一人で、この姿であつたら絶対に泣いて帰るね。

「また人間が来ないとも限らないし、今日は帰ろう。エーデルファイア、お母さんと一緒にいてね？ 危ないからお母さんから離れたらダメだよ」

「きゅ、きゅう……」

ダメだ、まだ怖くて普通に話せやしないや……。この、怖いとき

とか咄嗟のときに普通に話せなくなるっていうの、何とかならないかなあ。

そう考えながらも、私はお母さんの頭の上で、ドラゴンの姿のお兄ちゃんの背に乗り、洞窟へと帰還するのであった。

竜神って何ですか

お兄ちゃんの背に乗って洞窟に帰って来た私たちだったが、帰ってからの私は完全にお母さんの頭の上だ。飛んで逃げようとしても、何故かすぐに捕らえられるのだ。

「お、お母さん？」

「いいから、エーデルフィアはお母さんのそばにいてちょうだい」
「きゅい？」

何でかな？ どうしてかな？ どうしてお母さんはそうやって私を捕獲するの？

何となく危険を感じるから、お父さんのところにでも逃げたいのに、お母さんは逃がしてはくれない。

「お母さんばかりエーデルフィアを抱いて、ずるいよ。エーデルフィア、こっちおいで」

そうしていると、救い主が現れた。お姉ちゃん！

「きゅいーっ！ー！」

「つて、喋ってくれないの？ ああ、お母さんの無言の訴えが怖かったんだね」

「きゅー！」

怖かったよ、お母さんの頭の上から飛び立とうとするたびに捕獲の手が伸びてくるし、どうして捕まえるのか聞いても、そばにいてとしか言わないし。

だから、お姉ちゃんと呼ばれて飛んで、お母さんに捕まらなかった

たのはよかったよ。

そういえば、お姉ちゃんに聞いたら答えてくれるかな？　ずっと、疑問だったんだ。

「ねえ、お姉ちゃん。人間たちが竜神様って言ってたの、なあに？」
「ああ、それは私よりも、お兄ちゃんかお父さん、お母さんに聞いて。私もよく分かってないんだ」

なぬ？　ならばっと。

「おかーさん、竜神様って、何なの？」

「1000年位前に、人間たちが魔物と戦っているときに手伝ってあげたら、勝手に竜神扱いされたの」
「まもの？」

この世界、そんなものもあるんだ。

「そう。この山はお父さんやお母さんがいるから魔物もいなくて安全だけど、この山を一步でも出ると危険だからね。エーデルフィアはまだまだ出たらダメだからね」

「きゅ、きゅ！！」

それを言うお母さんが怖いです。まず、お母さんが怖いから勝手に山から下りたりしないよ。そもそも、ちびちびの私じゃ、一人で山を下りたりは出来ないよ。

私一人でパタパタ飛んでたら、山を下りる前に日が暮れちゃうって。それに、まだお母さんたちに甘えたいお年頃だから、絶対に一人はイヤ。

だから、思い切りお母さんに抱きついた。甘えたいから。いっぱ

いっぱい甘えたいから。

「お母さん。私、お母さん大好きだよ。だから、一人にならない。絶対に誰かと一緒にいる。一緒にいて？」

「私たちの可愛いエーデルファイア。いつまでも、ずっとお母さんたちはあなたと一緒にいるからね」
「うん」

ずっと一緒にいて。私を一人にしないで。一人は、寂しい。

最近、夢を見るんだ。私が一人ぼっちになる夢。私はドラゴンの姿じゃなくて、人態を取れていて、まわりにお母さんたちがいるだろうと思って探しても、誰もいないんだ。

誰もいない、一人だけ。私しか、いない。寂しい。

「大丈夫、お母さんたちはずっと一緒にいる。エーデルファイアを一人にはしない。絶対に、……絶対」

お母さんはそう言って私を抱きしめた。

「カーヴァンキス、オースティア、サーファイルス。ちょっと来なさい」

「ん？ どした？」

「どうしたの、エーデルファイア。……って、泣いてない？ あー、何かよく分からないけど大丈夫だよー」

「何がどうだっていうの？ 大丈夫だよ、エーデルファイア」

お母さんが呼ぶと、お兄ちゃんたちはすぐにそばに来てくれる。そして、代わる代わる私を抱き寄せた。

お兄ちゃんたち、温かいな。この温もりを失いたくない。だから、足掻くよ。何があっても足掻くから。

「ほら、涙を拭こうね、大丈夫だから」
「きゅ、きゅー」

もうまともに話せない。今の私の口から発せられる言葉は鳴き声だけだ。

「ただいまー」

そうしていると、お父さんが帰って来た。……そういえば、お父さんどこに行ってたんだろ。

「ちょっと町に出て、人間どもに忠告してきた。これではばらくは山に入り込むバカはいないだろ」

「お疲れ様、フォンシュベル。少しくらい、人間の王を痛めつけてきた？」

「少しといわず、徹底的に殴ってきたよ。……宰相を」

哀れ、人間の王。っていうか、宰相。いないなあと思ってたら、山を下りて町に出てたのか。そして、王を、というか宰相を殴ってきたのか。

あー、いろんな意味でごめん、人間たち。私が怯えたせいだね、ここまで宰相がやられたのは。

そう思ったのが顔に出てたのかな？ お父さんは不意に私の頭に手を置いてきた。温かくて気持ち良いんだよね、これ。

「エーデルフィア、大丈夫だよ。あれはそれ相応の報いだから」

奴らはあるうことが、エーデルフィア、君を怯えさせたんだ。それくらいは普通、というか手加減したほうだよ。

お、お父さん怖い……。につこり笑ってその言葉を放たれると本気で恐ろしいです。

家で一番怖いのはお母さんだろうけど、お父さんも結構怖かったんだね。今思いつきり実感したよ。

「きゅー！ きゆるきゅーっ！」

だから、助けてお兄ちゃんたち。私をこのにつこりと微笑みながら怖い言葉を放つお父さんから逃がして！！

お父さんが本気で怖いです。私を捕まえて、目を合わせてにつこりと微笑みながら言うから、余計怖いです。

「お父さん、エーデルフィアが本気で怯えてるから。冗談もほどほどにね」

「きゅい？」

お姉ちゃんがお父さんから私を回収してくれたよ、その瞬間思い切りお姉ちゃんにしがみ付いたよ。

それにしても、何ですと？ 冗談ですと？ 本気にしか聞こえなかったんだけど。

「ああ、本気にさせてしまったか。安心しろ、冗談だ。半分くらいは」

「残り半分は！？」

「いいじゃないかそんなこと。それにしても、もう怖くなくなったみたいだな、よかった」

……はっ！ まさか、私の恐怖心を拭い取るための作戦！？

あーうん、違うわ。目を合わせようとしたら露骨に目線外すし。

「おとーさん？」

「ななななな、何だい？」

「残り半分は、何？」

「エーデルファイアが気にすることじゃないから大丈夫だよ。ほら、
疲れただろう？ お昼寝しような」

「話変えたね？ おとーさん、本気で考えてるー！」

きゅいーっ！！ 鳴きながらも、私はお父さんの手によって強制的に私専用ベッドに下ろされた。くそう、まだ寝ないぞ！

「ダメだよ、寝なきゃ」

「やーあだ！ 眠たくないし、さっきのお話まだ途中だよ？」

「ダメだったら。初めて人間を見て、びっくりしただろう、今日は
だから、いつも以上に休もうか」

「そうそう。疲れて寝てってしなきゃ、大きくなれないよ？ いい
の？」

「きゅいー！？」

く、くう……、お兄ちゃん、お姉ちゃんの説得が恐ろしくなってきたぞ……。確かに、大きくなれないのは困る……。

「ほら、大きくなりたいなら寝ようね。って言うか、そろそろ寝ないと限界が来ると思っただけど」

「へ？」

「エーデルファイア、確か5時間以上続けて起きてたこと、ないよね？」

はっ！ そういえばそうだよ。言われてみればそうだよ！ ああ、聞いたら眠たくなってきた……。

とりあえず、ベッドでくるつと丸くなる。

「よしよし、素直ないい子は大きくなれるよ。おやすみ、エーデルファイア」

「きゅ……、おやすみなさい」

素直な私は早く大きくなるよ！　そのために今はご飯までぐっすり眠っていきましょう……。

「エーデルファイア、ご飯だよ。お腹空いたろう？　食べよう」
「んきゅ？」

ふわぁ、よく寝た。起きて、鼻をすんすんと動かすと、いいにおいがする。今日のご飯は、昨日のお肉の残りかな？

そう思いながら、私は少し飛んで私を起こしに来たお兄ちゃんの肩に乗ってそのまま連れて行ってもらう。人間、^{ドラゴン}楽するためにはいろいろと考えなくては。

「エーデルファイア、自分で飛んで行こうよ。甘えてばかりじゃダメだよ？」

「だって、寝起きって上手に羽動かせなくて、前一度落ちたもん。」

「……だから、怖いんだ。ダメ？」

「う！　そ、そうだったね。でも、ご飯食べた後は、きちんと自分で飛ぶんだよ！？」

「うん！　ありがとうカーヴお兄ちゃん！　大好き！」

ちなみに、これ事実。前、寝起きの大寝惚け状態でフラフラ飛んで、落っこちた。あれは痛かった。痛みで目は覚めたけど、最初は

何で床にいるのか、何で痛いのか分からなかったもん。

目を白黒させてたら、私が落つこちたことに気がついたお父さんたちが来て、全力でかまってくれたんだっけ。

「ああ、痛いだろう可哀想に」

「よしよし、大丈夫よ。ほーら、痛いの痛いの、どこか行けー」

子供用のこういう言葉、この世界にも、って言うかドラゴンにもあるんだね。あの時は本気でそう思った。

ただ、飛んで行けじゃなくて、どこか行けなのが若干リアル。

そして、この世界でもお母さんの手はすごい。お母さんに撫でられたら、本当に痛いのが行つたしね。

前世の小さい頃はお母さんの手は魔法の手だ！ って本気で信じてたけど、この世界でもそう言うのはありそうだ……。

おっと、そんなことを考えている間に、カーヴお兄ちゃんは既に私の席の前に立っていたよ。んちょ、よいちょ。羽を広げて席へと下りる。

「よし、エーデルフィアも来たしカーヴも席に着いたし、食べようか」

それからは食事の時間ですね、分かります。これは昨日のお肉です、ね、美味しいです。

昨日とは味付けが変わっている、というか、昨日は焼いていたけど今日は煮込んであるようだ。味がしみていてすごい美味しい！

というわけで、やっぱり今日も。

「お姉ちゃん、お肉取って？」

「ふふ、貸してごらん」

お肉と骨は別々に味わいたいから、きれいにお肉と骨を分けてください、ティアお姉ちゃん。

私が皿を押しやりながら頼むと、お姉ちゃんはにっこりと微笑み、肉を取り始めてくれる。うきうき、楽しみだな。

「はい、取れたよ。きれいに取れたから、純粹に肉と骨と別々に味わえるよ」

「うわあい、ありがとーお姉ちゃん！」

言われて見てみると、本当にきれいに肉と骨とが分かれていた。

お姉ちゃん大好きー！

はぎゅはぎゅはぎゅ。お肉美味しい、幸せ。がぶがぶがぶ。骨美味しい幸せ。も、最高すぎる。

「エーデルファイア、肉や骨ばかりじゃなくて、草も食べるんだぞ？」

あ、草もあつたんだ。気がつかなかったや。あるなら食べるー！

「はい、最低これくらいは食べること」

……いや、食べるって言っても、これは多くない？ しかも最低？

現在、私の目の前の皿には、草が山のように積まれています。お父さん、私の体の大きさ考えて。私の体と同じくらいに積まないで。

「ふう、盛りすぎよ、フォンシュベル。せめてこれくらいにしなさいよ」

そうしていると、お母さんがその半分以上をこっそりと移動させ

てくれた。ありがとーお母さん！ うん、このくらいなら食べるよ。

うん、食べ過ぎた。お腹がぼっこりと膨らんでるよ。いやいや、草の量が多かったからね。でも、これだけ食べても全部成長に行くのは嬉しいわー。

「エーデルフィア、いっぱい食べたね。ベッドまで飛べる？」

……、はっ！！ よし、やってみよう！

羽を広げて、飛ばたかせて……、ぼとっ。自分のお腹が重たくて飛べなかった、くそう。

「あー、やっぱりね。ほら、行こうか」

そうしていると、お兄ちゃんが落ちた私を拾い上げてベッドまで運んでくれた。ありがとーお兄ちゃん。

さあ、いっぱい食べた後には寝なくては。いっぱい食べていっぱい寝ていっぱい遊ぶ。これが、今の私が大きくなるための一番の近道なのだから。

あの二人に会いに行こう

今日の私たち兄妹の目的地。それは、じいちゃんとはあちゃんのところ。

じいちゃんとはあちゃんって、私、初めて会う気がするよ。じいちゃんとはあちゃんも一応この山に住んでるのに、何故か会わないんだよね。

っていうか、どうしてお兄ちゃんたち、そんなに嫌そうなの？
どうして？ どうして？

「ああ、大丈夫だよエーデルフィア。エーデルフィアはきっと大丈夫」

「そうね。まだ小さいから」

「ああ、気が重い」

「？」

お兄ちゃんたち、何でこんなに嫌そうなんだろう。それに、私は大丈夫って、何？

そんなことを考えている間に、私たちはじいちゃんたちの暮らす洞窟の前に立っていた。お兄ちゃんたちが先に進むのを躊躇しています。じいちゃんたち、どれだけ怖いのか？

「早く入れよ」

そうしてたら、いきなりサーファお兄ちゃんが誰かに蹴飛ばされた。……この人が、じいちゃん？

「おー？ エーデルフィアか？ 大きくなったなあ、おいで」

「きゅ？」

「どした？　じいちゃん怖くないぞ？　ほら、中に入るうな。カー
ヴァ、ティア、サーファ、お前らも早く来い」

やっぱりこの人がじいちゃんなのか。そう思いつつ、抱かれたま
まで洞窟へと入っていくと、そこにもう一人いた。つまりこの人が。

「ばあちゃん？」

「エーデルフィア！　ジャン、エーデルフィアを私にも抱かせてち
ようだい」

「じゃん？」

「ああ、ジャンって言うのはじいちゃんの名前だ。ジャニストリス
を略してジャンだな」

「じゃあ、ばあちゃんは？」

「ばあちゃん？　ばあちゃんの名前はシフォニアって言うの。だか
ら、ジャンからはニアって呼ばれてるわ」

へー。って言うか、じいちゃんもばあちゃんも優しいじゃん。お
兄ちゃんたち、何であんなに怯えてたのかな。

現在、ばあちゃんにしっかりと抱きとめられている私。さすがば
あちゃん、抱き方優しくて気持ち良いな。

「最後に見たのは、エーデルフィアがまだ生まれたばかりの頃だっ
たかしら？　本当に大きくなって」

「知らないい。覚えてないよ」

「当たり前よ。エーデルフィアはまだ生まれたてのちっちゃなドラ
ゴンだったんだから」

「きゅ？」

それ、本当にいつの話？　全く知らないんだけど。全く全然記憶

にないんだけどさ。

「だから、それが当たり前よ。生まれたばかりの頃を覚えてる子なんていないわ」

それもそうか。なら、今から新しく思い出を作ろう！　ってことで、目いっぱい甘えよう！

「きゅーっ！」

ばあちゃんに思い切り頼ずりする。ばあちゃん、すごーい嬉しそうだ。……それを見るじいちゃんの目が怖い！！

じ、じいちゃん、そんな目でこっちを見るのはヤメテ！

「ニア、俺にもエーデルフィアを抱かせてくれ。エーデルフィア、じいちゃんにも頼ずりしてくれないか？」
「んきゅっ」

そう鳴いてじいちゃんの元へ向かっていると、後ろから怖い声が聞こえた。

「　　あなたたちは、何もせずに帰るつもり？」
「きゅっ！？」

あわ、あわわ。ばあちゃんが、ばあちゃんがすごーい怖い！

「ああ、エーデルフィア、あなたは何も悪くないから怖がらなくていいの。私が言ってるのは、あなたたちよ。　　カーヴァンクス、オースティア、サーファイルス」

へ？ お兄ちゃんたち？ どゆこと？

「せつかく来たのに、どうして何もせずに洞窟から出ようとしているの。ほら、あなたたちも来なさい」

「う……うん……」

んう？ どうしてお兄ちゃんたちそんなに怯えてるんだろ。じいちゃんもばあちゃんも優しいのに。

そうやって恐る恐る近寄ってきていたお兄ちゃんたちだったが、ばあちゃんの射程距離内に入った瞬間に、蹴り飛ばされた。

「きゅ、きゅいー！！」

カーヴお兄ちゃん！ ちょ、大丈夫！？ そう思ってたら、起き上がったお兄ちゃんが盛大にばあちゃんに文句を放っていた。

「ばあちゃん！ いつもいつも、近寄って来た孫を蹴飛ばすのやめろよ！」

「おー、生意気になったな、カーヴァンキス。教育的指導っ！」

こ、今度はゲンコ！？ ゴンツて言う音がしたよ！！ お兄ちゃん大丈夫？ 大丈夫？

駆け寄りたいのに、私はじいちゃんに捕まって近寄れない、くそっ！

「……ってー。孫に問答無用で鉄拳かますなっつての。ほら、エーデルフィアが怯えてるじゃないか」

「あ、ホントだ。エーデルフィア、こっちおいで。じいちゃん、エーデルフィア離して」

お兄ちゃん！ 行く、行くから！ じいちゃん、離して！

「離すわけないだろう、バカガキ共。エーデルフィア、まだかまい足りないから離さない。カーヴアは大丈夫だ、ニアが手加減をしているからな」

そう見えない！ どう見ても手加減してるように見えない！ カ
ーヴお兄ちゃん！

ああっ！ ティアお姉ちゃんとサーファお兄ちゃんがカーヴお兄
ちゃんを犠牲にして、若干引いてる！

じいちゃん、私もお姉ちゃんたちのところ行きたいから離してよ
ーっ！

「きゅい、きゅいきゅいーっ！」

離してー！ そう言いたいのにくまく言葉が発せなかった！ く
そう！

でも、行動で大体何が言いたいかは分かるでしょう？ じいちゃ
ん、離して、離してったら！

「エーデルフィア、きちんと言わないと分からないよ？」

くうつ！ じいちゃん、分かっているながら言ってるね！？ 咄嗟
のときはうまく言葉が発せないんだ、勘弁してよ！

「きゅい！ きゃきーっ！！」

「あっはっは、分からないなあ」

「きやるるるー！」

「あー、全然分からんなあ」

おのれ、じいちゃん。分かっていながら徹底的に無視か。そう思
いながらじいちゃんを睨んでいると、突然視界が揺れ動いた。

「よし、エーデルファイアゲット。帰ろうか」

「よくやった、サーファイルス。走れっ！」

「ティア姉、エーデルファイアをお願い！」

「分かった。エーデルファイア、しっかり掴まってね！」

へ？ え？ いつの間にか私はサーファお兄ちゃんに捕獲され、
ティアお姉ちゃんに掴まっていた。そして、私をしっかりと捕まえ
たお姉ちゃんたちは、走る。洞窟の入り口まで徹底的に駆けていた。
だが、やはりじいちゃんたちは強かった。気がついたら二人とも
目の前にいたよ。目の前でにっこりと微笑んでたよ。

それを見たお兄ちゃんたちは、その場でしつかりと足が止まっ
た、怖かった。

でも、仕方ないよね。間違いなく後ろにいたはずのじいちゃん
たちが目の前に、洞窟の入り口を塞いでたんだから。

「そう簡単に逃げられると思うか？ もう少し精進するべきだな」

「あらあら。この程度で逃げれると思われてるなんて、ばあちゃん
悲しいわ」

「ちよ、じいちゃんたち怖いって………！」

あわ、あわわわわ。にっこり笑うじいちゃんたちが本気で怖いよ。
そんな意味を込めて、しつかりとお姉ちゃんの髪を掴んだ。

じいちゃん怖い、ばあちゃん怖い。 ぴぎやーっ！

「おかーさーんっ……！」

もういやもうダメ助けておかあさーんっ……！！

「エーデルファイア!!」

「おかーさん助けてもうやだー!　じいちゃんもばあちゃんも怖いー」

「この子に何をしたの!?　お義父さん、お義母さん!」

「ん?　可愛がる以外は何もしてないぞ?　なあ、ニア」

「もうヤダ怖いー!　きゅー!」

「大丈夫、大丈夫だからね」

じいちゃんもばあちゃんも怖いよー。もうお家帰るー。

「大丈夫よ、お母さんと一緒に帰ろうね。カーヴ、ティア、サーフア、帰りましょ」

「了解」

カーヴお兄ちゃんは言うと同時にドラゴンの姿に戻る。うん、帰ろう。もう帰る。じいちゃんたち怖いよう。

「んきゅー、きゅるー!!」

じいちゃんたち怖いー!　もうやだー!　そう言いたいののに、恐怖のせいか、鳴き声しかあげることが出来ない。くそう。

でも、お兄ちゃんたちはその間にじいちゃんたちのいる洞窟を抜け出して、大空を駆けていたよ。

「エーデルファイア、俺たちがあんまりじいちゃんたちに会いに来ない理由、分かっただろ?　あんまり会いたくないだろ?　扱かれたくないだろ?」

「きゅっ?」

あれ？ 質問の最後に気になる言葉があつたのだが、まだ鳴くことしか出来ないため、尋ねることができなかった。くやしい。

でも、帰る間、とにかく私は頑張つて尋ね続けていたよ。全部鳴き声にしかならなかったけどね。

「んきゅ？」

扱かれるって、どういうこと？

「んきゅっ？」

お兄ちゃんたち、ずっと扱かれてたの？

「きゅー、きやるる？」

じいちゃんたち、昔からそんなに怖いの？

って、いい加減恐怖よ飛んで行け！ そろそろ普通に話させろ！！

ちなみに、お母さんたちは私がずっと鳴き声しかあげないものだから、よっぽど怖かったのだろうと、とにかくずっとかまってくれたよ。それは嬉しかった。

事実、かなり怖かったからね、じいちゃんたち。最初は優しいじいちゃん、ばあちゃんだと思ってたから、余計怖かった。

「よしよし、怖かったね。でも、もう大丈夫だよ」

そうやって撫でてくれる手が優しくて。ドラゴンの姿のままで顔を舐めてくれるお兄ちゃんの瞳が優しくて。

「もう平気。ありがとー、おかーさん、おにーちゃん、おねーちゃん。大好き」

「お母さんも大好きよ、エーデルフィア」

「俺もね」

「俺も」

「もちろん、私もね」

うん、みんな大好き。

「おっと、お父さんも忘れないでくれなー？ お父さんもエーデルフィア大好きだぞ？」

「うん！ お父さんも大好きー！」

そしてこれは後日談。お父さんはこの日、私が寝たあとにじいちゃんたちに文句を言いに行っていたらしい。

お兄ちゃんたちが曰く、それは話し合いという名の喧嘩だったらしいよ？ じいちゃんたちとお父さんって、どれだけ怖い勝負になるんだろう。

とりあえず、私たちが手を出したら間違いない巻き添えを食らうくらいに恐ろしいものだろうね、きっと。

だって、竜神様だし。お父さんも竜神様、お母さんも竜神様。なら、絶対じいちゃんたちも竜神様だろ。竜神同士の勝負なんて、考えただけでも恐ろしいや。

「だから、安心しなさい」

次の日の朝、顔を合わせたお父さんにそう言われて本気で何かと考えたよ。お父さん、じいちゃんたちに何したの？ みたいだね。そしてね、この疑問はまだ解決してないんだよね、お兄ちゃん、お姉ちゃん。

「お兄ちゃんたち、じいちゃんたちに扱かれたの？」

「……思い出したいくない過去だ」

「うん、お兄ちゃんもそうよね」

「確かに思い出したいくないな、あれは」

「んきゅ？」

そそ、そんなに辛い過去なのか……。

「あ、不安にさせたみたいだね。でも、エーデルフィアはまだ大丈夫だから安心して。100くらいになったら、じいちゃんたちに近寄らなくすれば扱かれないよ」

曰く、人態を取れるようになったら徹底的に魔術、肉体的両方で扱かれる、らしい。こわ。

つまり、今の私で考えれば扱かれるのはまだまだ先ということですね、分かりました。極力近寄らないようにします。

教えて欲しいな

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、魔術教えて？」

小さいうちから、普通の魔術なら使えるんでしょ？ 人間の姿を取るのはまだ先でいいから、簡単な魔術くらい、使えるようになりたいな？

「うーん、まだエーデルフィアには早いと思うんだけど……」

「確かに。ね、エーデルフィア。自分の年言ってごらん？」

「きゅ？ 10だよ？ 10歳」

「そうだね、10だよ。10で魔術は早いよ」

んきゅ？ 10で魔術を習いたって言うのは早いのか？ 基準が分からないからなんとも言えないね。

だって、まわりに同じくらいの年のドラゴンはおるか、私たち家族とじいちゃんばあちゃん以外のドラゴン知らないしね。

でも、そんなことどうでもいい。だからさ。

「おーしーえーてー？」

「だ、ダメだったら！ そうだね、50くらいになったら教えてあげる」

「そんな先の話、いやー！」

50とかまだ先すぎるよー。この山じゃすることがあんまりないから退屈なんだよー。魔術教えてー！

「ダメだって。エーデルフィアにはまだ早いよ」

「でも、たいくつー！」

「うーん、じゃあ明日、町にでも下りてみる？ お父さんとお母さんがいいって言ったら連れて行ってあげるよ？」

町！？ はい、行ってみたいです！！

「よし、じゃあお母さんたちに話しに行こう」

「町？ 別に良いんじゃない？ 何かあつたら町が滅びるだけだし」

こわっ！！ そしてかるっ！ でも、お母さんからは許可をもらったぞ。次はお父さんだ！

「ダ・メ」

お父さん、超にっこり。これは手強そうだ。

「じゃあ、魔術教えて？」

「それもダメ」

「魔術教えてくれるか、町に行かせてくれるか、どっち？」

「どっちもダメ」

「でも、退屈だもん」

んきゅー。しょんぼりとした私の鳴き声があたりに響く。それを聞いたお父さんが少し焦り始めたよ。

……してやつたり。心の中だけで、にやりとほくそ笑む。お父さん、そのまま落ちて欲しいな。下を向きながら、ずっと悲しんでいるように見せつけ、お父さんの心変わりを待つ。お父さん、まだ？

「だ、だがな、町は危ないんだぞ？」

「俺たちがいるから大丈夫だよ」

「そうそう。エーデルフィアに害を成そうとするバカがいたら、即、引き裂くし」

「それが、ちょうどいいから新しい魔法の実験台になってもらうわ」

お兄ちゃんたちがお父さんを黙らせに入った！ 傍観者は参戦者となったよ。だから、お父さん、ね？

「あーもう、分かった分かった。但し、一人で勝手にどこかに飛んで行かないこと。絶対にカーヴたちに引っ付いていること。守れるか？」

「んきゅ！ 守る！ 守れる！」

顔を上げたら超笑顔。これもある意味必殺技。溢れんばかりに喜びを感じさせて、ここまで喜ぶのならばと、次を考えさせる方法だ。

ドラゴンとして生を受けて10年。前世のお父さん、お母さん。娘はあなたたちの子でいた頃以上に腹黒になりました。

そして翌日。いつも以上にぐっすりと休まされ、私たちは町へと向かう。いつものようにカーヴお兄ちゃんがドラゴンの姿を取り、私たちがその背に乗る。

さあ問題です。現在、私はどこにいます。見えないよね？ 見えないでしょ？

正解は、フードをかぶったお姉ちゃんの頭の上。お姉ちゃんのフードで殆ど私の姿は隠れていて見えないらしい。でも、私からはしっかりと外が見える。最強のだ。

「よし、行くか」

「カーヴァンキス、オースティア、サーファイルス。気をつけるよ、エーデルフィアを絶対に守るんだぞ、何かあったら手加減するな。責任は俺が持つ」

「了解。エーデルフィアに害を成すバカには手加減は必要ないな」

「うわー、お父さんもお兄ちゃんたちも怖いな。でも、町が楽しみだから何にも言わない。」

「おっと、それとこれをオースティアに渡しておこう。いいものがあつたら買ってくるといい」

「あ、ありがとうお父さん」

そう言ってお父さんがお姉ちゃんに渡したものの、お金かな？ そういえば、この世界のお金って見たこと無いや。後でお姉ちゃんに見せてもらおう。

そうしたやり取りの後、私たちはやっと出発する。山の入り口まではお兄ちゃんがドラゴンの姿で飛んでいくらしい。山を下りたら、後は歩くというか、走るんだってさ。

まあ、今は初めての町に期待を抱いて、お姉ちゃんにしがみ付いておくことにしよう。

でもその前に。

「お姉ちゃん、お父さんにもらったのって、お金？」

「ん、そうだよ。ってあれ？ エーデルフィアにお金の話、したのとあつたっけ？ お金ってどういうものか分かってる？」

「うん！ お金とモノを交換するんでしょ？ お金ってどんなの？ 見たいなあ」

「うん、合ってるよ。人の世界ではね、お金を渡してモノをもらう

んだよ。とりあえず、お金は町について落ち着いたら見せてあげるね」

おうけい、楽しみにしてるね。うーん、お金見せてもらったら、この国の金銭事情も軽く聞きたいかな。……って、10歳のドラゴンが聞くようなことじゃないか。

でも、この世界でのお金やモノの価値って分からないから、興味あるんだよねー。

「よし、山を下りたな。下に下りるから気をつけろよ」

そうしている間に山を下りたらしい。さすがカーヴお兄ちゃん、早いなー。

その後、人態を取ったカーヴお兄ちゃんとティアお姉ちゃん、サーファお兄ちゃんはすごい速度で走り始めた。ドラゴンだから？ 竜神様だから？ だからこんなに早いのか？ とりあえず、しっかりと掴まってないと風圧で飛ばされそうだな。

「エーデルファイア、しっかりと掴まっててねー」
「うっうっうっうん」

あわわ、風圧でしゃべりにくい。今はとにかくしっかりと掴まっていたほうがいいな。

「大丈夫？ 町についたよ」

おう！ あまりの風圧に、いつの間にか意識が飛んでたみたいだよ。気がついたら町についてたっぽい。

「んきゅ……、へーきい……」

ホントはまだ風圧の影響できついけど、でも心配はさせたくないからとりあえず大丈夫だと答えておくよ。

「まずは、落ち着ける場所に行くか。喫茶店系でいいだろ？ 行こう」

この世界にも喫茶店はあるのか。ああ、まあ普通にあるか。うん、失言だった気にしないで。

そしてついた喫茶店。そこではまずお姉ちゃんがフードを脱ぐ。え？ そしたら私丸見えなんだけど！？

「これはこれは、いらっしやいませ、竜神様方。あら？ 今日随分と小さなお客様まで。どうぞ、お席のほうへ」

……あれ？ 奇異の目で見られなかった。山で初めて見た人間は思いつきり奇異の目で見えてきたから、町の人間みんながそうなのかと思っただけ、違うのか。

って言うか、町の中でもお兄ちゃんたちは竜神として有名人なのね、実感した。私たちがこの喫茶店に入ってから、入ろうとする人はいるけど、私たちを見て回れ右して帰っていくよ。

「とりあえず、エーデルフィアには深皿に何か甘いものを、俺たちはいつものやつな」

「畏まりました。少々お待ちくださいませ」

いつもの？ お兄ちゃんたち何気に常連さん？

そう思っていると、私の目の前に何かが広げられた。お姉ちゃん、これ何？

「これがさつきエーデルフィアと話したお金だね。まずこれが一番小さなお金、鉛貨。これが10枚集まると次のお金、銅貨になる。で、銅貨を100枚で、銀貨。銀貨が100枚で金貨。金貨が10枚で晶貨になるの」

ん？　へ？　えっと、ちょっと待って。

まず、一番小さなお金が、鉛貨で、それが10枚集まったら銅貨にランクアップして、銅貨が100枚で銀貨になって、その銀貨が10枚で金貨、金貨が10枚で、一番上のお金の晶貨になるのか。よし、おっけい。

「ほら、一枚ずつ持ってごらん？　なくしたらいけないから、私たちの目の届かない場所に持っていかないようにね？」

「うん、ありがとー！」

そうして一枚ずつ持っていくのだが、これは見た目の判断がかなり簡単だな。まず、第一に色が違う。

晶貨は水色というか、少し透明味を帯びた感じの色で、その下の貨幣たちはそのままだ。金貨は金色で、銀貨は銀色、銅貨は銅色、というか茶色で鉛貨は鉛色。

でも、全部きれいだなあ。

「もういいかな？　なくしたら怒られちゃうから片付けるよ」

「……え、あ、うん。ありがとう」

いやいや、10歳にしてようやく初めてお金を見ることが出来たよ、私。10歳にして初めてお金を使う状況に来たよ。

遅すぎじゃね？

「お待たせしました。小さな竜神様にはこの近くで取れた果物のジュースをお持ちしました。気に入っていただけるとよいのですが…」

そうしてたら頼んだものが来たみたいだね、果実100%ジュースだね！

でも、知らないものは最初は怖いんだよね。というわけで、恐る恐る口を近づけ、舐めた。……美味しい。

ぺちぺちぺちぺち。私が舌でジュースを掬って飲む音があたりに響く。うん、これ美味しいよ。甘くて、何だか優しい味。

「気に入っていただけたようで何よりです。もっと飲みたいのでしたら、まだありますので遠慮なく仰ってくださいね」
「んきゅ！」

ならば遠慮なく！　っていうか、ホントこれ美味しいわ。

「よっぽど気に入ったみたいだね」

「美味しそうに飲んでるもんね」

「エーデルファイア、可愛い」

だって、美味しいもん。そういえば、お兄ちゃんたちは何を飲んでいるの？　ねえ、一体何を飲んでるの？　ちよびつとちようだい？

「あー、あげてもいいんだけど、多分エーデルファイアには苦いよ？」

「シロップを入れても、多分まだ苦いよね」

「だろうね。ほら、論より証拠。飲んでごらん、これはシロップが入ってるから少しはマシだから」

サーファお兄ちゃんはそう言って自分の持つカップを傾けて私に

飲みやすいようにしてくれた。

って、あれ？ この色、この匂い。 これってコーヒーじゃないか！！

確認のために、その液体に舌を伸ばす。舌で掬って飲む。うん、やっぱりコーヒーだ。

久しぶりの味だ！。でも、ちびちびドラゴンの舌にはかなり苦いよ……。

「にぎやい………」

「だから言っただでしょ？ この子にさっきのジュースもう一杯もってきてあげて」

「畏まりました」

もう少し大きくなれば、懐かしきコーヒーの味も美味しく感じられるようになるかな？

前世の私って、一応コーヒー大好きで殆ど毎日飲んだのに、転生してからは無いと思ってたから全然飲んでないんだよね。いろんな意味で、禁断症状出てたよ。

でも、その禁断症状はさっきの苦味で完全に吹っ飛んだ。これを美味しいと感じられるようになるまではコーヒーいらない。苦い。

そのためにも、早く大きくならんかな。

教えて欲しいな（後書き）

ストックが尽きました（泣）

これからは一話出来次第更新となります。
さすがに二作品毎日更新は辛いですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8690x/>

まさかの転生物語

2011年10月29日21時14分発行